LLを使ったListening訓練の一方法

河崎　寛*・南　優次*

An Experimental Class Training of Listening Ability for Freshmen in a Language Laboratory

Hiroshi KAWASAKI, Yuji MINAMI

はじめに

本校にLLが設置されて3年になる．その間，この設備を有効利用するために私達は試行錯誤を繰り返した．今なお満足ゆく利用方法を編み出した訳ではないが，'94年4月から7月にかけて経営情報科1Bのクラスを対象に行った18回の演習授業のうち，13回の授業に適用した教材とその使用方法が意外に効果的だったと判断するので，ここに報告する．

LL演習の最大の特徴は，読む，書く，聞く，話すの4種の言語活動のうち，聞く，話す，の2分野でその利点を活かすことができるということにあろう．特に，言語学習の初級段階であれば，話すことの限られた活動量に較べれば，LLが内包する聞くための利用価値は無限と言えそうである．また，LLでの言語の受信訓練の過程で，日本語の排除が比較的容易に行いうることも，もう一つの利点である．本校に設置された機械を使えば，限られた範囲内ではあるが，学生は各自の能力に応じて個別作業を進めることが出来る．この個別の自主的作業もLLの利用価値を高めている．

以上のLLの利点を考慮しつつ，実際に演習を長期にわたって推し進めるために，次のような実際問題にも留意した．

（1）教材の編集が容易であり，編集作業が指導教官にとって重すぎる負担にならないこと．

（2）演習内容の的を一点に絞ること．今回はリスニング訓練に力を傾注した．

（3）学生の能力に似合った教材を選ぶこと．今回は，学生が不慣れなリスニングなので，中学生レベルのものを選んだ．

（4）演習作業の評価が簡単にできるテストを用意すること．学生にとっても教官にとっても，これは欠かすことのできない反省材料となるのだから．

1．教材

教材には，「実用英語技能検定'93年度用3級全問題集カセット」のうちから，2次面接試験を吹き込んだテープを使用した．ちなみに，技能検定試験において実際に行われる面接テストとは次のようなものである．

受験生は，試験官の手許に用意された6種類の英文のカードの中から，1枚を選んで手渡される．次に，そのカードを1分間黙読し，続いて音読するように求められる．その後，英文の内容に関して5つの質問がなされる．これらの質問に英語で答えて，理解度と英語の運用能力を試されるのである．これは英語の総合的能力が問われる重要なテスト形式である．下に，このカードと質問の事例を1つだけ掲げておく．

（カード見本）

Jiro is a student at a high school in Tokyo. He lives in Chiba and it takes him an hour and a half to get to school by train and bus. So he has to get up and leave home early in the morning. His mother gets up much earlier than Jiro and prepares breakfast and lunch for him. At school, he is a member of the tennis club. He usually practices tennis for three hours every day. When he returns home, he is very tired because of the hard practice. He has dinner, takes a bath, and quickly goes to bed.

Questions

No.1 How long does it take Jiro to get to school?
No.2 Why does his mother get up much earlier than he does?
No.3 What club does Jiro belong to at school?
No.4 Is he tired when he comes home?
No.5 What does he do after having dinner and taking a bath?

* 宇部工業高等学校英語教室

今回，上に例示したカードを音声化したテープを教材に選んだ理由は2つある．1つは学生側にある事情に応えるためであり，もう1つは素材のもつ質の均一性と量の豊富さである．

学生が抱える事情とは次のようなものである．

学生たちは英語学習の意義について疑うことはしない．しかし，彼らを絶えず悩ますのは，「どの程度まで実力をつければ十分と言えるのか」，「自分の力は今どのレベルにあるのか」，「手っとり早く目標に到達するにはどんな方法があるのか」の3つの疑問である．

学校のカリキュラムはこれらの疑問に答えを出すべく用意されたものであるが，その狙うところは最大公約数的なものであり，方法は画一的で，評価は学校や学科の枠に縛られて偏狭である，という印象を避けられない．この学校カリキュラムに対して近年勢いをつけているのが，資格認定試験を武器にした検定制度である．この制度にはそれなりの欠点はあるものの，上記の3つの疑問については明快な答えを用意していて，それ故に広く世間に認知されて，今では学校カリキュラムの一画に食い込みそうな勢いである．従って，本校学生間にも評判はよく，検定試験の受験者も増えて来ている．高専の英語授業にもこの検定試験のもつ利点を利用するのが賢明だと思われる．

もう一つの選択理由は，すでに述べたように，この素材のもつ均一な質と長年にわたって蓄積された問題数の多さである．今回使用した'93年度用の面接カード19枚を前もって調べた所，大体次のようなことが判った．

（1）内容は全て或る中学生か，あるいは中学生に関係する人々の日常茶飯事を書き綴った文章である．

（2）3人称を中心とした文で構成されている．従って，質問に答える文は，主語の人称について混乱がない．

（3）固有名詞は，人名やよく知られた国名，都市名のほかは殆んど使われていない．僅かに，Fifth Street と Peter Pan が日本の学生にとって聞き馴れぬ名前であろう．

（4）文章は，一般的事実を現在時制で紹介し，特定の行為や出来事を過去時制で描写している．未来時制も散見されるが，その時制をもつ文は，全体を通じて4つにすぎない．単純現在形や can、may の助動詞が，この時制を代理しているからかも知れない．ただし，1枚のカードでは，内容はすべて現在時制で描写されており，他の3枚のカードではすべての内容は過去時制で描写されているものもあった．

（5）13枚のカードでは，被伝達文は直接話法で示されており，間接話法による伝達文は見当たらない．

（6）関係代名詞を用いた複文は一つもない．

（7）本文に関して問われる質問は内容に応じて現在時制であったり，過去時制であったりするが，総じて過去形のものが多い．

（8）5つの質問は，yes か no の答えを求める一般疑問文1つと，疑問詞を用いた特別疑問文4つとから成っている．すべてのカードはこの形式を踏んでいる．

（9）質問に対する回答部分はすべて本文の中に見つけることができる．内容を整理したり，計算したりする必要はほとんどない．

以上が，このLL演習のために，「実用英語技能検定試験」の問題例を使用した理由である．他にも，「Intensive Course in English」（ELS社版）や「ニュー・スタンダードLL教本」（大修館書店），「A Practical Course in Listening Drills」（大修館書店）などを使用したが，いずれも演習方式が定まらず，作業は散漫になって途中挫折した．1年間，あるいは半年間にわたって使用する教材を選んだり編集し直したりすることは，LL授業を行うに当たって一番苦心する所である．市販の教材は山ほどあるが，実際の使用に伴う条件や制約に当てはめれば，いずれも一長一短があって，そのままでは使用に耐えるものは少ない．

2．演習の手順

LL演習では次のような手順で演習作業を行った．

（1）学生に出席ボタンを押させる．回答用紙を配布し，前回の答案を返却し，反省点を指摘する．

（2）各自で用意した空テープやヘッドフォンを装着させる．

（3）一斉自動録音装置を使って，親テープからカードの英文を全員に同時録音させる．録音時間は約1分．

（4）録音した英文を各自のノートに書きとらせる．辞書の使用も可．ノートの取り方は，テープを何度でも反復して聞き，それをメモさせるのである．メモは逐語的なものであれ，摘要だけのものであれ，学生に任せる．この時間約20分から25分．

（5）親テープから質問文を流し録音させる．録音時間約1分．

（6）ノートを参照したり，録音テープを反復して聞きながら，テスト用紙に質問の回答を記入させる．この時

間約8分.

（7）回答用紙を回収し，正解を与える.

書きとりや回答に要する時間は，かなり大きな個人差があるが，ほぼ全員が終了するのを確認して測ったもので，英文の内容や質問の難易に応じて伸縮させた．ただし，いつまでも終了しない少数の学生については，適当な時間で作業を打ち切らせて次のステップへ進んだ.

この演習は初級者向けのもので，聞きとりや理解のスピードに重点を置いたものではないから，反応の遅い学生の所要時間にステップ毎の時間を合わせた．50分の授業時間には教室移動のための時間も含まれるが，準備段階では，毎回テープ持参を忘れる者やスイッチを押し違える者がいて，スムーズな作業が妨げられた.

以上の作業手順を一覧表にまとめれば，次のようになる.

（演習の手順一覧表）

区　分	作業の内容	教官留意点	時間
準備	1、前回の答案返却 2、回答用紙配布 3、出席ボタンを押す 4、カセット，ヘッドフォン装着	1、机の番号に合わせて出席番号順に着席 2、全員カセットの向きを揃える．1つだけでも揃わないものがあれば，機械は作動しない.	3分 ～5分
本文 録音	親テープの英文を各自のテープに録音する.	1、一斉録音装置で行う. 2、録音と同時進行で聞きとりをさせる.	1分
聞き取り 書き取り	テープの英文をそのままノートに書きとるか，簡単にメモする.	1、隣席の者とできるだけ相談しないようにさせる. 2、テープを反復させ，聞き落としのないようにさせる. 3、辞書を使わせる. 4、固有名詞は板書する. 5、25分で切り上げる.	20分 ～25分
質問 録音	本文に関する質問を録音する.	録音抜きで，直接回答してもよい.	1分
回答	回答用紙に回答を記入する.	隣席の者の回答を真似ないようにさせる.	8分
後片付け	1、回答用紙提出 2、後片付け，教室移動	1、忘れ物のないように注意する. 2、落書きをさせない.	5分

3．目標と手段

この演習では，目標を「聞きとる」ことの一点に定めた．この分野では学生は初級者なのだから，教材は易しく，中学生英語のレベルとし，演習方法は単純で，短時間（50分以内）でまとまるように心懸けた．しかも，時間毎に演習の成果を評価し，学生に学習目標の達成度を実感させる処理方法を取った.

演習の手順一覧を見れば判然とすることだが，これは単純なヒヤリングではない．テープに収録した物語や出来事を一旦書きとって文字化する作業である．すなわちディクテーションである．その過程で，聞きとり難い語句や文は何度も繰り返して聞き直すことができるようにしてある．また同時に，辞書を使って音を補足することもできる．このようにして，音で聞きとった内容を，自分なりに意味の通るものに仕立て直す余裕が与えられてある．この演習の全作業のうち一番重要な部分は，機器を使ってテープを反転反復しながら満足ゆくまで聞くことなのである．聞き落とした一つの音がいかに文の理解を滞らせることか．聞き違えた一語がいかに大きな戸惑いを惹き起こすことか．これは外国語の学習をした者なら必ず経験するところである.

各自が能力に応じて，文意が理解できるまで繰り返し聞く．この点にこそ，このLL演習の最大の利点を見い出す．音読やラジカセ利用にもそれぞれの長所があるかも知れないが，多人数相手のリスニング訓練となれば限界があろう．一見システム化されて画一的な作業しかできそうにないLLも，システムの枠内であれば，無限に自由で迅速な作業を可能にしてくれる．この個々人の必要に応じた自主作業こそ，演習時間を効果あるものにする要因だと考えられる.

一般に，英語を聞くことの習熟度を測るには，まず音声できかせた英語を口頭で日本語に直させることから始まるかもしれない．これが最も単刀直入で手間隙いらぬやり方である．しかし，LL演習の狙いの一つが日本語からの脱出であるなら，やはりこの点では英語を使って反応させる方法をとりたい．聞いた英語を逐語的に再生させるとか，内容を英語で要約させるとかが考えられる．しかし，この時間では，学生に流す英語は単発的なセンテンスではなく，まとまった内容の文章なのだから，その内容について英問英答を試みることとした．その英語質問も面接テストで使用されたものをそのまま利用できるのである．質問の形式は定まっていて，一つの文章に関して5つの質問が用意されている．そのうち4つはwho、when、where、howなどの疑問詞疑問文であり，残り1つはyesかnoの返事を求める一般の疑問文となつている．限定されたテーマを扱う内容といい，きまり切った質問様式といい，金太郎飴のように等質等量の教材をいつでも入手できるのである．まことに理想的な教材といえる.

4．クラス

LL演習の対象とした経営情報学科1Bの英語に関する授業は次のように編成されている．

一般授業科目			単位数	学年別配当				
				1年	2年	3年	4年	5年
	外国語	総合英語	6	4	2			
		英語理解	8		2	4	2	
		英語表現	6	2	2	2		
		英会話	2	1			1	

一般授業科目		単位数	学年別配当				
			1年	2年	3年	4年	5年
	外国事情	4				2	2
	外国語演習	5	1	1	1	1	1

経営情報学科は文系学科であり，その性質上，他の工学系学科より英語教育に力点が置かれている．一般授業で22単位，専門授業で9単位が必修であり，修業年限の5年間で，他学科より11単位か，或いは，13単位も多く英語を履修することになる．学生達も将来の進路決定に語学力が大きな要因になることを心得ていて，その意識が彼らの積極的な英語学習を促している．例えば，'94年6月に実施された英検の受験者は21名で，うち16名が合格し，中学校時代に既に資格取得している者10名を加えて有資格者は26名になった．自分達の語学力を，端的に資格の有無やその資格の等級で世間に訴えたいという傾向は，学年が進むにつれて強まるものと予想される．

技能の習得も学生と教師の気質や能力に大いに左右されるので，つまり，低学年における技能教育は主観的な人間関係に基づくので，報告者から見た1年Bクラスの気質に少し触れておく必要がある．

このクラスは男子8名，女子32名から成る．クラス全体から感じとれるのは外向的性格である．物怖じしないで，思ったこと，感じたことを素直に表現する性格が支配的である．少数派の男子と女子の間に志気の偏りや対立があるわけではない．ごく普通の明朗なクラスである．逆説的だが，このような開放的，外向的な性格をしたクラスの連中が脇見しないでLL演習に取組んでくれたからこそ，この授業が「英語の聞きとり」という所定の目標に対して効果的であったと判断できたのかも知れない．

5．評価の方法と基準

学校教育はその成果を評価することなしには存在し得ない．すべての人間活動に評価が伴うのと同じ理由である．ただし，学校では，評価を次のステップのための反省材料として，また，前進のための手がかり，足がかりとして学生に還元してやらねばならない．

この評価の方法や，評価から汲み取れる教師の意向が授業を進める上で大きな意味を持つから熟慮が必要である．すなわち，評価から懲罰的な意向ばかりを学生が汲みとれば，学習意欲を削ぐことになろう．他方，欠点や落度を無視した称揚ばかりでも，それは学生の現実把握能力を歪めると考えられる．しかし，今では称揚型の方が人間の向上意欲をよりよく刺激するとするのが一般的な見解となっている．このことは，高専でも，カリキュラム実施の上で，評価の全体の平均点の位置を座標軸上のプラス方向へ大きく寄せていることからも明らかなことである．

さて，このLL演習でも，一般の試験で行われているように，50分単位の作業の評価を点数化することにした．これが最も分り易い方法だからである．しかし，「易しい英語」学習の成果を点数化しようとすると，評価の基準の設定が意外に難しいのである．

先ず，大ざっぱに次のように考えた．

1回分，50分の作業の成果を10満点で評価しよう．これには合理的な理由があるわけではない．100点満点であっても，20点満点であってもよいわけである．しかし，1回分の作業量は，聞きとり書きとりのことを考慮すればかなりの量になるのだが，最後に締めくくる5つの質問は量質共にいかにも貧弱だ．定期試験の10分の1にも相当しないだろうが，一応区切りよく10点としよう．

配点は1問2点とし，各問毎に1ケ所の間違いで1点減点し，2ケ所で0点としよう．従って，得点合計は各問の残り点を集計したものになる．

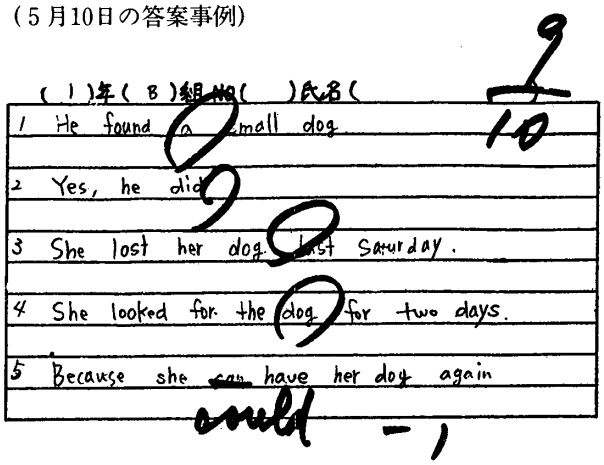
扱う英語のレベルが中学校程度であって易しい．テープを反復反転して繰り返し聞きとることが認めてある．聞きとったものはノートにメモして確認できる．辞書を引いて細部を確認できる．作業も，各ステップ毎に十分時間をかけることができる．

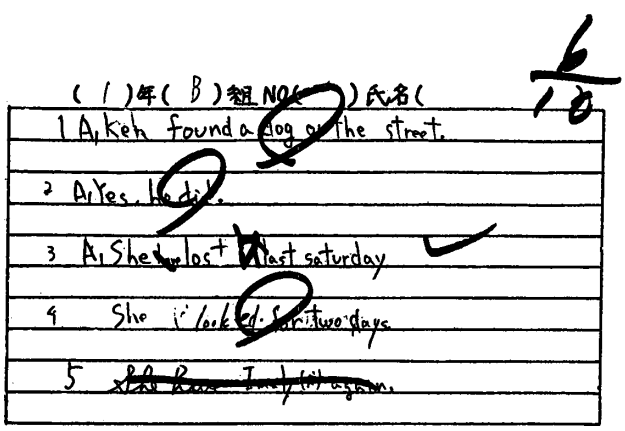
以上の条件が備わった上での作業であるから，その成果の評価，すなわち，ここでは点数化の基準は少し厳密

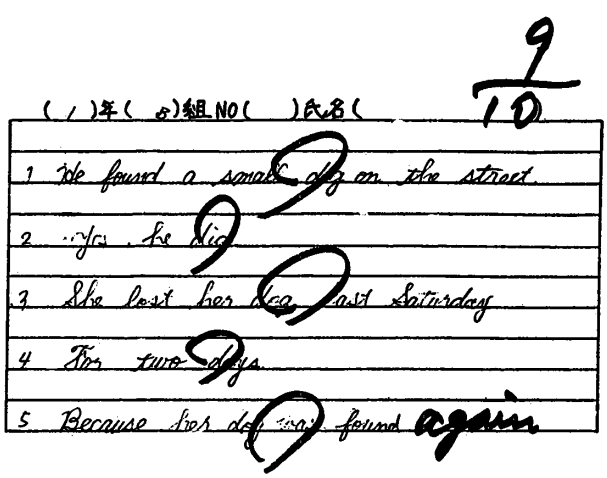
にした．減点は，綴り，句読点から始めて，冠詞，副詞，形容詞の配置，そして特に，動詞の時制と語尾変化の誤りを対象とした．ただし，句読点のうちコンマは寛大に扱った．

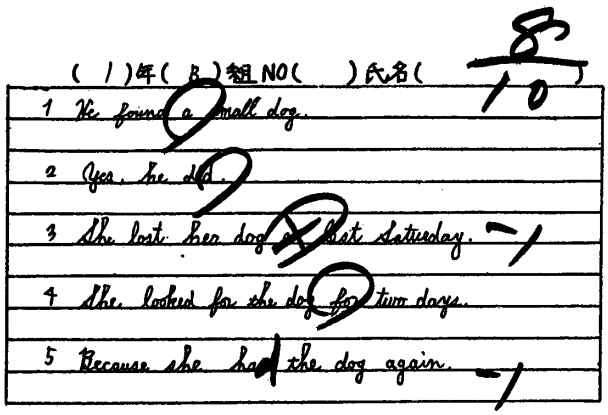
次に，縮小コピーし保存しておいた答案の中から，5月10日と5月12日に行った第1回テストと第2回テストの答案例を掲示しておく．事例掲示に使用するために答案からは関係学生の出席番号と氏名は抹消したが，第1

（5月10日の答案事例）

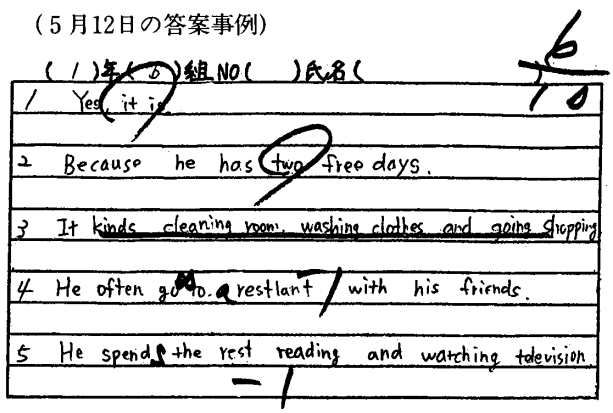


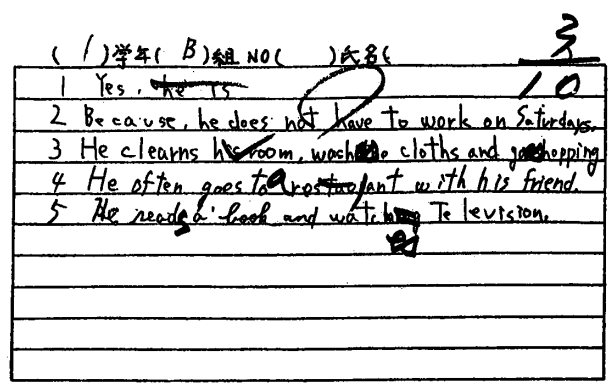


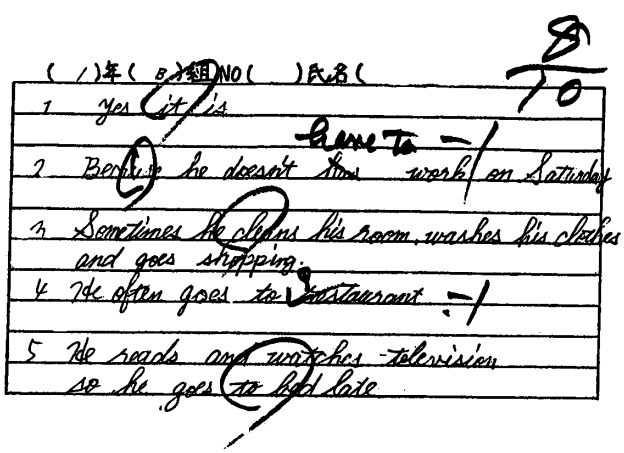


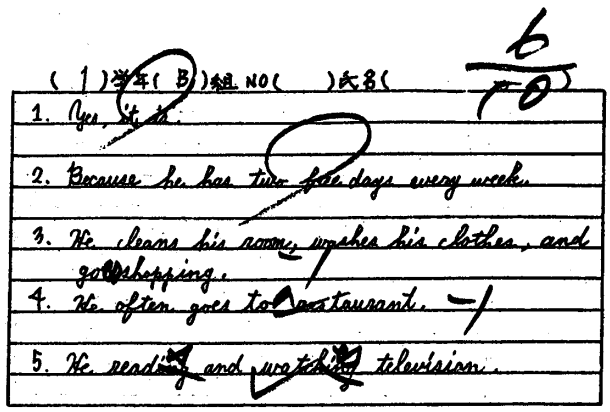


（5月12日の答案事例）









回の事例と第２回の事例は，それぞれ同一学生の答案を重ねて使わせてもらった．

６．成績一覧

前項で述べた評価の方法と基準に従って点数化した成績を一覧表にしてみた．記載されているのは５月10日から７月14日までの13回のテスト成績である．これらの答案は，採点した後すべて４分の１の面積に縮小してからコピーし，集計と分析に備えて保存しておいた．

５月10日に至るまでに行った４回の演習授業は機器の取扱いや授業形態になれるために費やした．そのために，その間２回行ったテストの答案は，原本を保存していないので，集計と分析の対象から外した．また，６月14日に実施した前期中間試験の出題もほぼ日頃と同じ演習の手順を踏んだものだが，「聞きとり・書きとり」のステップを教室外で行わせたので，これも集計や分析の対象外とした．このことは「成績の処理」の項で述べることとする．

さて，一覧表から判ることは，得点のクラス平均は必ずしも回数を重ねるに従って右肩上りに上昇するとは限らない，ということである．後半のテストでは，得点平均の大きな下落はなくなっているが，予想されたようにコンスタントに７点台に平均点が落着くこともなかった．また，２回目と７回目で大きく平均点を引き下げた原因は何であろうか．学習内容や質問のレベルから判断すると，数回のテスト後に得点平均値は８に届くであろうと予想されたが，それは余りに楽観的であることが判った．この実際と予想のギャップは分析の項で明らかにしたい．また，個人別に眺めても，平均点が５を下回る学生が３名いる．彼らの真面目な努力に相応する成果を産む方法があるかも知れないが，も少し時間をかけてこの方法に

(成績一覧表)

テスト	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	平均
学生	5/10	5/12	5/19	6/17	6/21	6/23	6/27	6/30	7/5	7/7	7/8	7/12	7/14	
1	9	5	5	6	8	8	7	5	6	7	8	8	9	6.8
2	1	2	6	7	4	5	6	6	5	2	5	3	4	4.3
3	8	9	6	7	8	10	8	8	8	7	8	7	7	7.8
4	6	4	6	4	4	5	6	9	7	8	8	8	4	6.1
5	8	6	4	8	9	9	4	9	9	9	7	8	7	7.5
6	8	3	6	8	8	9	8	6	3	9	8	10	9	7.3
7	7	5	8	4	5	8	4	7	7	4	8	8	7	6.3
8	5	5	5	7	9	7	7	9	4	7	7	8	8	6.8
9	9	6	8	6	10	7	9	8	9	10	10	9	8	8.4
10	10	8	8	8	9	7	8	9	8	9	9	10	8	8.5
11	9	7	7	8	8	8	6	8	6	10	10	-	10	8.1
12	8	6	4	8	6	6	7	6	8	8	8	10	7	7.1
13	6	4	6	4	4	9	9	5	7	8	8	9	7	7.1
14	7	2	4	3	3	3	0	5	5	5	8	6	1	4.0
15	10	9	10	9	9	10	8	9	6	9	9	-	10	9.0
16	7	8	9	9	7	9	9	6	9	8	10	8	8	8.2
17	8	6	8	9	6	6	4	7	6	7	6	7	6	6.6
18	7	3	5	5	10	6	2	5	7	7	7	9	4	5.9
19	10	7	8	8	10	7	8	10	7	10	9	9	6	8.4
20	8	6	5	6	10	8	6	9	6	5	5	9	7	6.9
21	10	9	5	7	7	5	6	8	6	10	8	9	10	7.7
22	7	10	5	4	7	7	2	8	8	7	8	8	10	6.8
23	9	5	7	7	10	6	8	9	9	9	9	9	6	7.9
24	8	6	10	8	9	8	6	6	7	9	9	7	9	7.8
25	9	8	7	8	7	7	3	9	6	8	9	9	7	7.5
26	9	6	6	2	3	8	2	8	8	5	7	6	5	5.8
27	6	3	6	3	6	5	6	2	4	4	7	8	2	4.8
28	6	6	6	8	8	7	5	9	9	7	8	9	7	7.3
29	7	5	7	6	6	4	8	7	3	7	7	8	9	6.5
30	7	6	9	8	8	8	6	6	8	9	8	8	7	7.5
31	5	7	7	8	8	7	2	5	4	9	7	10	9	6.8
32	10	8	9	10	9	9	9	8	8	9	7	8	8	8.6
33	6	3	5	2	3	7	4	7	8	4	8	10	4	5.5
34	6	8	5	8	7	5	5	8	6	6	7	7	8	6.6
35	6	7	5	7	8	10	7	7	5	8	9	8	8	7.3
36	5	3	3	4	6	7	2	9	4	5	7	8	5	5.2
37	-	-	5	6	6	10	7	9	8	9	8	9	10	7.9
38	9	5	8	6	7	9	7	10	8	8	9	10	6	7.8
39	9	10	6	9	10	8	5	8	7	6	8	9	8	7.9
40	7	3	5	6	8	8	9	8	-	-	-	6	8	6.8
平均	7.5	5.9	6.4	6.5	7.3	7.3	5.9	7.4	6.6	7.4	7.9	8.3	6.9	7.0

(注) 一覧表の中の学生番号は，実際の出席番号と同一ではない．

馴れるように指導したい．この方法が現時点では一番良い方法だと思われるからである．

７．成績の処理

「演習の手順」の項で触れたように，答案の返却時には，その都度最も多く見られた誤答の例を２，３指摘して注意を促した．また，３人称単数の主語に現在時制で付けられるｓの欠落，時制の取り違え，疑問詞疑問文の答え方，などは一般的注意事項として毎回繰り返しておいた．

次に，カリキュラムに応じて報告する学期毎の成績は次のようにして算出した．

集計された演習の成績は直近の定期試験の成績に算入した．すなわち，５月19日迄の実習テストの評価は前期中間試験に組み入れ，それ以後の，６月17日から７月14日までの10回分は前期末試験の成績に算入した．また，定期試験は次のようにして行った．

試験開始直前の授業時間に，４回分のカード英文を学生に録音させ，そのうちの３回分を任意に選んで，その

内容をいつもの演習で行うのと同じように，試験時間で英問英答させることとした．ただし，録音内容の聞きとりや書きとりは普段の4倍になるため，授業時間内で処理し切れないで余った分は宿題として課し，試験当日までに各自で完成させておくように指示した．試験場にはこの時に記入したメモノートの持ち込みだけを許可した．4題を宿題として課し，そのうち3題を実際に試験に使うことにした理由は，3題の英語が50分の試験時間に適量だと判断したからであるし，4題の量を課題にしたのは宿題という課題形式を利用して少しでも多く学生に演習させておこうという教師の欲心の現れである．試験では，選んだ3題の英文とそれに関する英問とをそれぞれに組み合わせたテープを前もって編集して作っておき，それを授業時間の演習と同じように学生に録音させた．学生は持参のノートを参照しながら英問英答するのである．結局，定期試験では，普段演習で行っている「聞きとり書きとり」のステップを省き，これは宿題として準備しておき，3倍の量をこなす，というのがその内訳である．

以上のようにして行った試験は普段通りの採点基準で30点満点で採点した．中間試験では，この30点に3回分の成績を加えて60点満点として，更にこれを100点満点に換算して報告した．

8．答案の分析

以上「教材」の項や「演習の手順」の項で述べた過程を経て堤出された答案にすべて目を通したところ，次のような事実が判った．

（1）時制を取り違えた答えはごく少数であった．これは予想外であった．すなわち，学生は現在時制の質問には現在形で，過去時制の質問には過去形で上手に答えた．この点を予想外だとして驚いたのは，時制の統一という概念を持たない日本人であれば，文の途中から時制は過去から現在へと無意識のうちに飛躍するだろうと予想したからである．もっとも，素材の英語が大部分は基本的な単文で構成されていたからかも知れない．

（2）3人称単数現在時制の動詞の語尾に付すsの欠落は，演習の回数を重ねても感心する程には誤りの数は減らなかった．特に第2回テストで，次のような回答では，下線部が欠けて平均点を押し下げていた．ただし，採点に際しては，同一の文中において，同じ種類の誤りを2回以上繰り返しても減点は1にとどめておいた．

He cleans his room, washes his clothes and goes shopping.

He reads books and watches television.

（3）受動態の表現が大変苦手である．例えば，第3回テストで，Where was the dinner held?の質問に対して，It was held in a tatami room.とか，多少とも受動態を意識して，In a tatami room.と答えられた者は16名にすぎない．また，正解者の中にも，They held it in a tatami room.として受動態を避けて答え，戸惑いを隠し切れない者も2名いた．第4回テストでは，Who was invited to her house?の質問に対して，All the members were (invited).と答えられた者は17名であった．(2)や(3)のような事例は，語句ははっきりとテープ録音されているにもかかわらず書き取る段階で起こる誤りである．音が消滅したのではなく，概念が存在しないために起こる混乱であろう．

（4）第4回テストで，They found three eggs in a hen house. と答えるべき所をhenが聞きとれなくて，代わりにherやその他の語を苦しまぎれに挿入した回答例が多くあった．a hen houseを聞きとった者は12名であった．

（5）第8回テストで，He made iced tea.の正答に対して，He made ice tea.とした者が多数いた．正解者は3名である．日本の「アイス・ティ」からの連想が誤答の原因と思われる．

（6）第12回テストで，正答She bought sugar, flour, cocoa and eggs.で，flourをflowerと綴った者が多数いた．正解者は7名である．発音は正しく聞きとっても，flowerには異義語のflourがあることに気付かないのが原因と推測される．

（7）第11回テストで，I love you even without a present.の正答に対して，without a presentのフレーズを，with our present, with a presentなどと記したり，中には大きく逸れて，was not a presentやwas a present, with out a presentなどとする者がいた．正解者は8名であった．誤答の原因は前置詞withoutの音は明瞭に把えながら，それを機能ある単語として記憶していなかったためと推測できる．

（8）第7回テストで，仲々に機転を要求する質問Why did they buy only one can of grape juice?に対して，正答はBecause they didn't have enough money for two.なのだが，多くの学生はenoughを落として，Because they haven't money.とかBecause they had no

money.などの単純な全面否定にした.正答は16名であった.誤答者の中にはenoughの音は聞こえても,その用法を十分に心得ていないために答えからはずした者もいたと推測される.また,enough money for...のように,前置詞forとの関連もあまり意識されていない.

以上(4)、(5)、(6)、(7)、(8)、(9)のような事例からは,音は確かに録音されているにもかかわらず,そして,文脈はかなり明瞭に把握されているにもかかわらず,語法を十分に知らないために,見当外れの語と置き換えたり,2つ以上の語に分解したり,或いは全く無視したりすることが行われると推測される.リスニングを通して正しく意味を把握するにしても,日本人にとっては日常の「読む」「書く」などの分野から得た知識が不可決である,という恐るべき事実がこのことから汲みとられる.

(9) 第2回テストで,本文のHe spends the rest of his free time at night reading and watching television.の部分に関してHow does he spend the rest of his free time at night?と質問がなされるが,これは仲々の難問で,正答としてはHe spends it(=the rest of his free time) reading and watching television.やHe reads books and watches television.の英語が予想される.ところが,わずか3名の正答者に対して12名がHe spends reading and watching television.と答えている.この手の誤答が多くあるのは,目的語の「時間」の意識が,日本語独特の「何々してすごす」の表現の中に呑み込まれて,英語表現では言葉にならないままに消滅してしまうためであろう.

(10) 第3回テストで,本文の"I'd like to learn to sit on tatami. When in Japan, I should do as the Japanese do."の部分を指して尋ねた質問,What did she want to learn?に正答した者は11名にすぎない.誤答の原因は,本文中のthe Japaneseを「日本語」と聞き違えてShe wanted to learn Japanese.と回答したり,或いは,She wanted to learn sit on tatami.のように答えて,to sitとすべき所が不完全であったりした者が多数であった.to-infinitiveの連続が戸惑いを生み誤答を増やしたと思われる.

(11) 本文のTomorrow Mr. Sato's going to drive her to a high school.の部分を指した質問How is Mr. Sato going to take her to a high school tomorrow?への正答は12名であった.誤答の大部分はdriveを自動詞扱いにして,目的語herを付記しないままにHe is going to drive.で済ませている.「彼女を自動車で連れて行く」の意味にするためにはdriveに目的語herを付すべきことに気付かないでいる.このdriveも日本語に取り込まれているためにかえって扱い難い単語といえる.

(12) 第5回テストで,本文のYoshio felt very happy to help her.を指してHow did he feel after helping Miki?と尋ねる質問に対して,He handed his dictionary to Miki.のように誤答した者は10名である.これに対して,正しく答えた者は20名.誤答者は,疑問詞Howは手段や方法を尋ねる語と早とちりしていて,辞書の受け渡しの方法として,「手渡した」と答えたものと推測できる.

(13) 第13回テストで,本文では直接話法で表現されて,a gentleman said to them kindly, "The bus drivers are on strike!"となっている箇所を尋ねて,Why didn't the bus come?の質問がなされている.この問題は学生に2つの困難点を課している.1つは直接話法で伝達された文を間接話法に近い形で答えるように求めている点である.これは時制の転換もあって学生には仲々厄介な問題である.もう1つの困難点は彼らにとって耳慣れぬare on strikeという語句が使われている点である.果たせるかな,多くの者はこの語句をaround strikeやaunt strikeのように聞きとって,正答した者はわずかに5名であった.また,同じ文章中にThey were on their way to the concert hall.とある箇所を尋ねて,Where were they going?のように進行形で質問がされている.were on their way to...がwere going to...と同意義であることに気付かないで誤答した者が多数あった.正答者24名.

(14) 第9回テストで,本文中のhe decided to go to the fish shop and buy three fishの部分に触れて,質問では,Where did he buy three of the fish?と表現されている.答えは当然He bought them at the fish shop.となるのだが,そのためにはat the fish shopかin the fish shopのような場所を表す副詞句がatやinを使って考案されなければならない.ところが,多くの者は本文中に使われたto the fish shopの句から脱却できないままに,He bought them to the fish shop.としたり,或いはHe decided to go to the fish shop.としたりして,見当外れに回答した.正答数は11であった.

以上の(9)から(14)までの指摘点に見られるのは,本文中にある表現をそのまま利用して回答するのではなく,余分の文法知識や語彙を利用して,多少とも元の英語に手を加えて答えなくてはならない,ということである.

英問英答を通じて行うこのLL演習は,上手に聞くためには，ただ単にリスニングの訓練に終始するのではなく，読むことや書くことを通じても，絶えず英語の知識を吸収し続けておくことが不可決だという事実を思い知らせてくれるのである.

次に，この項で述べたことを一覧表にしてまとめておく.

9．アンケートとまとめ

'94年度の前期のLL演習をしめくくるため，また，今後の演習に資するために9月2日に実施したアンケートを転記しておく．アンケートは個人指導にも利用するため記名とした．各項目の後ろの数字は，その項目に賛成した学生の人数を示す.

1．LL演習は楽しく行いましたか.

(英問英答に見られる誤答の事例一覧表)

ポイントテスト	Q&Aに見られる誤りの例．( )内が正しい英語	備　　考
1 5/10	lose, losed(lost), can(could), have(had) a dog(her dog)	本文は過去時制で記述.
2 5/12	spend reading(spend time reading), cleans his room and wash his clothes (cleans his room and washes his clothes), to restaurant(to a restaurant)	本文は現在時制で記述.
3 5/19	The dinner held in...(The dinner was held in...), drive to school(drive her to school),	本文は現在と過去の両時制で記述.
4 6/17	in her house(in a hen house), All the members invited(All the members were invited), make(bake)	本文は現在と過去の両時制で記述.
5 6/21	leave, leaved(left), always bring(always brings),	本文は現在と過去の両時制で記述.
6 6/23	desided, dicided(decided), because we so interesting...(becuase it was so interesting...),	本文は現在と過去の両時制で記述.
7 6/27	didn't have money for...(didn't have enough money for...), drink(drank), by two straws(with two straws), on the fixed street(on the Fifth Street)	本文は現在と過去の両時制で記述.
8 6/30	ice tea(iced tea), They put on their swimsuit and jump into...(They put on their swimsuits and jumped into...),	本文は現在と過去の両時制で記述.
9 7/5	to the fish shop(at the fish shop), cook(cooked),	本文は現在と過去の両時制で記述.
10 7/7	bring, bought(brought), There were the other birds outside...(The other birds were outside...), brought at home (brought home)	本文は過去時制で記述.
11 7/8	with our present, with as present (without a present), all most(almost), two expensive(too expensive)	本文は過去時制で記述.
12 7/12	flower(flour), suger(sugar)	本文は現在と過去で記述.
13 7/14	around strike, aunt strike(are on strike), wait for bus (wait for the bus)	本文は過去時制で記述.

1)はい(33)　2)いいえ(6)

2．演習をまじめに行いましたか．

1)はい(40)　2)いいえ(0)

3．演習は英語のリスニング訓練として適切でしたか．

1)はい(39)　2)いいえ(1)

4．教材のレベルについて

1)難しすぎた(20)　2)丁度よかった(20)

3)易しすぎた(0)

5．教材をテープに録音してから使うことについて

1)適切なやり方だった(37)　2)易しすぎる．親テープを聞くだけで直接質問に回答するのがよい．(0)　3)テープを使って録音しても難しすぎた．(3)

6．発音練習を取り入れることについて

1)是非そうして欲しい(26)　2)その必要はない(12)

7．英検の資格取得について

1)中学校時代に3級の資格を取った(10)

2)今回6月に取った(16)

3)受験したが不合格だった(2)

4)まだ一度も受験していない(8)

5)申し込みはしたが受験できなかった(2)

6)2級の資格は是非取得するつもりだ(18)

アンケートの回答はおおよそ予想した通りであった．ただし，第4の質問に対して，教材が「難しすぎる」と答えた学生が半数に達したのは意外であった．英検3級レベルの英語であっても，耳だけを頼りに理解しようとすれば困難に感じられるのであろうか．その困難の実態は「答案の分析」で具体的に指摘した通りである．そしてその困難を乗り越えるための心構えも同じ項目に並べておいた．それは，言葉は年令に比例して広がる世界を把握するために必要な手段であるから，精神活動に応じて言葉の知識は絶えず膨張していかなければならない．そのためには，大いに読まなければならないし，書かなければならないし，しゃべらなければならない，ということである．その過程で克服すべき困難が絶えることはあるまい．アンケートの「難しすぎる」はこのような種類の困難と理解したい．何故なら「成績一覧表」が示しているように，クラスの平均値は7ポイントであって，これは決して学生の力量と教材の難易度の間のアンバランスを標示しているとは考えられないからである．

アンケートから伺えるもう一つの重要点は，「発音練習を是非演習に取り入れて欲しい」という要望である．リスニングとは裏腹ながら，発音練習には点検のシステムを授業時間に組み込み難い面がある．最終的には個人指導に頼らざるを得ないところがあるからである．しかし，発音訓練による補完があって始めてリスニングの演習も実際の英語の運用に生かされるのであるから，その具体的な方法の考案や教材の選択には今暫く時間をかけねばなるまい．

完

(平成6年9月20日受理)